

## Comments and Discussions

Emiko USUI (臼井恵美子)\*

### Discussion Paper “THE ROLE OF MIGRATION AND REMITTANCES IN A GROWING ECONOMY: PERSPECTIVES ON SOCIAL CLASSES IN RURAL INDIA AND BIHAR,” by Mariko Kato

#### 要旨

本論文は、インドにおいて最も急進的な経済改革が行われた直後の時期にあたる1993年度と、100%のFDIが開放され、高成長を遂げた時期にあたる2007-08年度に行われた大規模家計標本調査であるNational Sample Survey (NSS) の個表データを用い、異時点間比較を行うことにより、農村から国内の州外へと向かう移住の変化を捕捉することを目的としている。さらに、移住が有する経済機能と、州外移住者による送金の経済効果について、インド特有の社会階層ごとに検討を行った。とりわけ、インドの貧困な被差別家計として知られる「スケジュールド・カースト」(Scheduled Castes、ダリット)のおかれている経済状況の変化をより大きく反映させるために、2008年当時においてもなお経済水準の低いビハール州のデータを用いた比較検討を行った。

経済改革直後の1993年度においては、あらゆる社会階層において、経済水準の低い人々が、州外に「押し出されて」出稼ぎを行う傾向があったものの、より激しい成長を遂げた2007-08年代においては、出稼ぎや移住を行う家計の経済水準が大幅に改善したばかりでなく、出稼ぎ家計と非出稼ぎ家計の間において、経済水準の逆転が生じ、出稼ぎ家計の経済水準が非出稼ぎ家計を上回っており、その傾向は、被差別家計であるSCにおいて特に顕著であった。ただし、貧困線以下のSC家計には送金による所得改善効果は認められなかった。しかしながら、インドにおいて最も所得の低いビハール州においては、1993年には農業労働に従事し、移住者のいるSC家計は、あらゆる家計の中でも最貧に位置していたが、2008年には、そのような家計による移住が最も増加したばかりでなく、経済水準が大きく改善した。そればかりか、ビハールにおいては、貧困線以下の被差別家計であっても、送金を受け取っている場合には経済水準は優位に改善していた。つまり、2000年以降の経済発展によって、移住機会とモビリティが拡大したことにより、最貧層の経済制約条件が緩和されたと考えられる。

#### コメント

過去の研究によれば、農村の被差別階層は、経済発展から取り残されるため、そうした家計は、経済成長にしたがって、相対的に貧困化していくと考えられていたが、本研究より得られた結果は、ビハールの貧困線以下でありなおかつ被差別階級に属する家計が送金を受けることで家計の経済条件が改善したことを示している。これは過去の研究結果とは、まったく対照的であり、さらにインド国内のデータからは見られない顕著な傾向であった。つまり、国内の経済成長につれて、インド農村からの国内移住機会が増加しているだけでなく、より廉価な労働力に対する需要の高まりを受けて、ビハールの被差別家計のような、経済的後進地域の貧困な人々の労働移動が増加している。こうした労働需要はもちろん労働コストの格差を利用しようとする動きを反映したものであるものの、低所得層のモビリティを喚起することによって、移住に伴う送金が、社会的・経済的にもっとも後進的な階層にとって、所得制約条件を緩和や、経済条件の改善に寄与する、エンパワーメントの手段としての側面を持ちうる可能性があると考えられる。

\* Associate Professor, Graduate School of Economics, Nagoya University.  
名古屋大学大学院経済学研究科准教授